

Collège de France
Philologie de la civilisation japonaise
2018-2019

Le Roman du Genji:
Poésie, langue et bouddhisme

2. Le 15 janvier 2019

- *Le Genji, surface et profondeur (1)*-

- 左衛門の内侍といふ人はべり。あやしう
すすろによからず思ひけるも、え知りは
べらぬ心憂きしりうごとの多う聞こえは
べりし。内裏の上の『源氏の物語』、人
に読ませたまひつつ聞こしめしけるに、
- 「この人は、日本紀をこそ読みたるべ
けれ。まことに才あるべし。」と、のた
まはせけるを、

- ふと推しはかりに、「いみじうなむ才がる。」と殿上人などに言ひ散らして、「日本紀の御局」とぞつけたりける、いとをかしくぞはべる。この古里の女の前にてだにつつみはべるものを、さる所にて才さかし出ではべらむよ。

- Kumazawa Banzan (1619-1691)熊沢蕃山
- 源氏外伝 *Genji-gaiden*
- Claire-Akiko Brisset, Jacqueline Pigeot, Daniel Struve, Sumie Terada, Michel Vieillard-Baron
- *Regards critiques. Quatre réflexions sur la littérature classique dans le Japon des XVIIe-XVIIIe siècles*, Institut des Hautes Etudes Japonaises du Collège de France, 2009.

- 常在靈鷲山：
- 末の世は 雲のはるかに へたつとも てら
ささらめや 山のはの月
- *sue no yo ha / kumo no haruka ni / hedatsu to
mo / terasazarame ya / yama no ha no tsuki*

- 願我於未来長寿度衆生：
- 世の末の 人も闇にや まとふとて いらし
と誓ふ 有明の月
- *yo no sue no / hito mo yami ni ya / mayou to te
/ iraji to chikau / ariake no tsuki*

- この式部の丞といふ人の、童にて書読みはべりし時、聞き習ひつつ、かの人には遅う読みとり、忘るるところをも、あやしきまでぞ聡くはべりしかば、書に心入れたる親は、「口惜しう。男子にて持たらぬこそ幸ひなかりけれ」とぞつねに嘆かれはべりし。

- それを、「男だに才がりぬる人は、いかにぞや。はなやかならずのみはべるめるよ」と、やうやう人の言ふも聞きとめて後、一といふ文字をだに書きわたしはべらず、いとてづつに、あさましくはべり。

- 読みし書などいひけむもの、目にもとどめずなりてはべりしに、いよいよかかること聞きはべりしかば、いかに人も伝へ聞きて憎むらむと、恥づかしさに、御屏風の上に書きたることをだに読まぬ顔をしはべりしを、

- 宮の御前にて『文集』の所々読ませたまひなどして、さるさまのこと知るしめさまほしげにおぼいたりしかば、いとしのびて人のさぶらはぬもののひまひまに、をととの夏ごろより、「楽府」といふ書二巻をぞしどけながら教へたてきこえさせてはべる、隠しはべり。

- Sugawara no Takasue no musume 菅原孝標女
c.1008 – après 1059.
- かくのみ思ひくんじたるを、心も慰めむと、心苦しがりて、母、物語など求めて見せ給ふに、げにおのづから慰みゆく。紫のゆかりを見て、続きの見まほしくおぼゆれど、人語らひなどもえせず。誰いまだ都なれぬほどにて、え見つけず。いみじく心もとなく、ゆかしくおぼゆるままに、この源氏の物語、一の巻よりしてみな見せ給へ、と心のうちに祈る。

- 親の太秦にこもり給へるにも、異事なくこのことを申して、出でむままにこの物語見果てむと思へど、見えず。いと口惜しく思ひ嘆かるるに、をばなる人の田舎より上りたる所に渡いたれば、
- 「いとうつくしう生ひなりにけり。」など、あはれがり、めづらしがりて、帰るに、「何をか奉らむ。まめまめしきものは、まさなかりなむ。ゆかしくし給ふなるものを奉らむ。」とて、

- 源氏の五十余巻まき、櫃ひつに入りながら、ざい中将、とほぎみ、せりかは、し
らら、あさうづなどいふ物語ども、一袋
取り入れて、得て帰る心地のうれしさぞ
いみじきや。はしるはしる、わづかに見
つつ心も得ず心もとなく思ふ源氏を、一
の巻よりして、人もまじらず几帳きちや
うのうちのうち臥ふして、引き出でつつ
見る心地、后きさきの位も何にかはせむ。

- 昼は日暮らし、夜は目の覚めたる限り、火を近くともして、これを見るよりほかのことなければ、
- おのづからなどは、そらにおぼえ浮かぶを、いみじきことに思ふに、夢に、いと清げなる僧の黄なる地の袈裟着たるが来て、「法華經五の巻を疾とく習へ。」と言ふと見れど、人にも語らず、習はむとも思ひかけず、物語のことをのみ心にしめて、我はこのごろわるきぞかし、盛りにならば、物語のことをのみ心にしめて、

- 文殊師利言：「有娑竭羅龍王女，年始八歲，智慧利根，善知眾生諸根行業，得陀羅尼，諸佛所說甚深祕藏，悉能受持。深入禪定，了達諸法，於晞那頃發菩提心，得不退轉，辯才無礙。慈念眾生、猶如赤子，功德具足，心念口演，微妙廣大，慈悲仁讓，志意和雅，能至菩提。」
- 智積菩薩言：「...不信此女於須臾頃、便成正覺。」
- 龍女謂智積菩薩、尊者舍利弗言：「我獻寶珠，世尊納受，是事疾不？」 答言：「甚疾。」女言：「以汝神力，觀我成佛，復速於此。」

- 「海龍王の後になるべきいつき女ななり」
- 「何心ありて、海の底まで深う思ひ入らむ。底の「みるめ」も、ものむつかしう」

- 我はこのごろわるきぞかし、盛りにならば、
- かたちも限りなくよく、髪もいみじく長くなりなむ、光の源氏の夕顔、宇治^{うぢ}の大將^{だいにしやう}の浮舟^{うきふね}の女君^{をんなぎみ}のやうにこそあらめ、と思ひける心、まづいとはかなく、あさまし。